

ともに談る

令和年8(2026年)1月26日発行

連日、十勝らしいキーンと音がなるような寒さが続いています。今年の立春は2月4日。立春には、少し寒さも緩んでほしいです。柔らかな日差しの春が待ち遠しいです。

今回の「ともに談る」は訪問教育学級について、とかねっと夏季研修会について、自立活動研修の3つについてお伝えします。

1 訪問教育学級の様子

今年度の訪問教育学級は、在宅生2名、病院生3名の計5名が在籍しています。

今年度も感染症対策の対応を継続しながら、在宅生は自宅へ訪問して2時間の授業を週3回、病院生は帯広病院へ訪問して1時間半の授業を週4回行っています。

在宅生は自宅での学習を中心に行いながら、登校学習や校外学習、泊学習への部分的参加などの活動を、体調に合わせて設定し、学習をしています。

病院生は5年ぶりに違う病棟の友達と合同で集団学習ができるようになり、夏場には簡単なゲームや式行事を友達や管理職の先生も交えて行いました。また、院内の「売店」で買い物学習をしたり、遠出散策として「郵便局」、校外学習として「おびひろ動物園」に行ったりし、自然や動物、いろいろな人と触れ合うことのできる活動ができ、経験の幅を広げることができました。

また、訪問教育の中でも ICT 機器を活用した授業をしています。例えば在宅や病院を学校と遠隔でつなぎ、

学部行事や学年の学習などの授業に参加をしたり、友達の様子を撮った動画を見聞きしたり、事前に練習して撮った動画で学習発表会の演目に参加したりするなど、登校することが難しい状況でも友達や先生との関わり合いをもつ学習を行うことができます。継続して取り組んでいるスイッチ教材では、提示されたスイッチを自ら押す様子が見られることが増え、成長が感じられます。

感染症対応もあり、経験の幅を広げることが難しい訪問学級生ではありますが、もっている力を最大に引き出せるよう、学習内容や教材を日々模索しながら授業を進め、子供たちがより主体的に、楽しく学ぶことができる学習を目指して取り組んでいます。



在宅生の学習

ICT 機器を活用して宿泊研修に部分参加



病院生の学習

(5年ぶりの院外活動&合同学習)

(文責:訪問教育学級 佐藤)

おすすめの本

行動障害のある人へのアプローチ～「施設職員 ABA 支援入門」暗黙のルール～

(松本淨司・著 学苑社)

園山繁樹先生 (筑波大学名誉教授) 推薦

強度行動障害に取り組む施設職員待望の1冊！

強度行動障害の対応は易しいことではないが、ABA（応用行動分析学）の有効性は多数の研究により実証されている。支援者一人ひとりが、科学的根拠のある方法を本書から学ぶことができる。

* 本書「推薦のことば」より引用

2 とかねっと～夏季研修会報告～

7月29日(火)に幕別町札内コミュニティプラザを会場に、令和7年度とかねっと夏季研修会が開催されました。

特別支援教育に関する約60名の方々が集まり、研修会を実施することができました。今年度は北海道教育庁十勝教育局教育支援課学校教育指導班、指導主事・特別支援教育SVの西山雄基氏に「特別な支援が必要な子どもの実態把握について～校内支援体制の構築に向けて～」について情報共有をいただいた後、北海道立特別支援教育センター教育課主査の岡森博宣様を講師に迎え「子どもたちの実態把握と適切な支援～校内体制の充実～」についての講演をしていただきました。特別支援教育の動向や実態把握の目的や活用方法などのお話をありました。また、個別の教育支援計画の活用法、校内でのコーディネーターの役割や校内体制づくりで取り組むべきことなど幅広く学ぶことができました。その後、グループ協議を行い今回の学びをどのように活かせるかという話し合いをしました。それぞれの悩みや学校の環境違いなど話す内容は多岐に渡り話が尽きませんでした。半日日程でしたが中身の濃い研修会となりました。



参加者からいただいたアンケートでは、「ケース会議や支援委員会についての話をもっと深く聞いたかった」「校内の体制が適切ではなかった」「研修で得た知識を発信したい」「グループ協議の時間がもっとほしかった」などのたくさんの意見や感想がありました。

(文責:小学部 伊藤)

3 自立活動研修報告

11月に本校全職員を対象に自立活動研修を行いました。摂食指導について、北海道拓北養護学校の自立活動教諭、青木菜摘先生とリモートを繋いでの研修となりました。

摂食指導とは、「食べること」を無理に頑張らせるのではなく、食べ物や食事の時間に安心して関わることを大切にした指導であること、また、食具は「上手に使うこと」を目的にするものではなく、食事の場に安心して関われるようになるための大切なツールになることを教えていただきました。食具を嫌がる背景には、口当たりや重さ、冷たさなどの感覚的な不安がある場合があり、無理に使わせるのではなく、まずは「見る」「触る」「机に置いておく」など、段階的に慣れることから始めることがあることを知りました。食べることが苦手なお子さんの中には、食材の見た目や匂い、触った感触、口に入れた時の感覚などに強い不安を感じる場合があります。そのため、「食べない」「嫌がる」という行動は、わがままではなく、お子さんなりの精一杯のサインであることが多く、摂食指導では、「食べる・食べない」だけで判断せず、「食材を見ることができた」「触ってみようとした」「食事の場に座れた」といった小さな一步一歩が大切だということを学びました。無理に口に入れさせたり、急に量を増やしたりすることはせず、お子さんのペースに合わせながら、「食べることってちょっと安心できる」「少し楽しいかもしない」という経験を積み重ねていくことが大切ということが改めてわかりました。

本校では、こうした関わりを続けることで、少しずつ食事への不安が減り、食べられる幅が自然に広がっていくことを目指しています。また、食事場面だけではなく、授業を通して食に関する興味が広げられるように指導・支援していきます。

(文責:高等部 堤)

